

松本清張『古代探求』

抜粋

(各文冒頭の数字はページ／文中の太字は引用者による／・・・・・・は中略部分)

47 「出雲神話」も「日向神話」もヤマト朝廷の机上の創作だが、部分的には前から中央に知られていた出雲や九州の右の独自の地方説話が部分的な資料となっている。出雲や日向の地名は、『風土記』撰上以前でも中央には部分的に知られていたろうから、『記・紀』の机上架構にこれらの地方説話や地名を挿入して一種の現実感を与えている。

87～88 西から新しく朝鮮系集団が畿内に割りこんでくるまでの各地域の先着朝鮮系移住者集団がいわゆる「出雲国家」「吉備国家」「北九州国家」「古志国家」と呼ばれるものであり、**「出雲国家」の「版図」は畿内から紀伊、山城から古志にかけての勢力ブロックを包含していた・・・・・・**。列島の西半部は、近畿地方などを包含している「出雲国家」（「出雲」といふいまの行政区域島根県にイメージが限定されるので、この地名は避けたほうがいいが、すでに定着化されているため、ほかに云い現わしようがない。強いて言うなら**「出雲＝近畿国家」**であろうか）と、「吉備国家」と、「北九州国家」の三つの大きな勢力圏に分れていたことになる。「北九州国家」はもちろん南朝鮮と最も近く、冒頭のところで述べたように、その「倭種」は南朝鮮の「倭」と同一であるくらいに朝鮮人の色合がより濃厚であった。それが「倭人伝」にある「卑弥呼」の「女王国」の継続だと考えてもよい。「出雲国家」（＝近畿）から独立していたのは当然である。「吉備国家」はその内陸こそ出雲と接しているが、これは瀬戸内海沿岸の生産を握り、内海の航行権や漁撈権も持っていたようだから、「出雲国家」に対し、従って近畿とも対立していた。このことは『播磨国風土記』にみえる「出雲」との抗争記事や、大和朝廷ができて「吉備」が中央と対立していたことなどからでも分る。こうした勢力分布のところに、おそらく**三世紀末か四世紀の初めごろに、九州北部から新しい朝鮮からの渡来集団が畿内に強引に入ってきた**。それはまさに割り込みであった。この北部九州からの新来集団は、それまでの「北九州国家」ではない。むしろ**従来の「北九州国家」はこの半島からの新鋭集団に包含され、「女王国」の性格も新来者の性格に同化されたであろう**。おそらく「倭人伝」にみえる女王国の強敵「狗奴国」もその新勢力の前に敗退したにちがいない。そうしてこれが九州北部に一世紀ぐらいいて勢力を増大させ、**五世紀末ごろに畿内にむかって東進を開始したのであろう**。これが**天皇家の祖先勢力**であり、いわゆる**「天孫民族」**と呼ばれるものであろう。その部族の小首長たちが『記・紀』でいう**「天つ神」**である。これに対して先住の在地部族の首長たちはすべて**「国つ神」**となる。新来者からは天と地との観念である。

178 だいたい日本列島の西半部は南方系の民族が基幹であったが、そのうち朝鮮人の移住が北部九州にふえてきた。地理的条件からいっても、南方からの移住には限度があるが、朝鮮半島と北部九州は間に対馬、壱岐をはさんで渡来が容易だから、絶えず朝鮮人の流入があった。南方からの渡来は停滞的であり、半島からのそれは継続的であった。朝鮮からの流入人口が九州を中心に西日本にふえつづけたことは想像にかたくない。日本に移住してからの人口増加（先住民との雑婚も含めて）も十分に考えられる。かくて次第に、といっても**長い間にわたって、西日本には朝鮮渡来人の分布が濃くなっていった**。このあたりまでを**「原始形態」**と呼んでおく。

178～180 『魏志』に記された「倭国」とは、北部九州に立てられた朝鮮渡来人による「国」だったのである。**朝鮮の「倭」が海峡を渡って北九州の「倭人」となったのである**。こう考えると、倭人伝の「倭国乱れ、相攻伐すること歴年」の意味もよく分る。**九州に渡来した朝鮮人部族の開で勢力争いが起ったのである**。早く来た部族とおそく来た部族との間に土地の争奪などが行われた結果にちがいない。**その争いの無益を知って各部族が相談の上で共立したのが鬼道の「卑弥呼」だった**。これには各部族があまりに争うとその経済的な破滅を招くと自覚したことや、**南九州の「狗奴国」という共同の敵**への意識が強くなったからであろう。「倭国大乱」は大和勢力と九州勢力の戦いではない。

こうみるならば、魏が帯方郡官吏を通じて「女王国」に間接支配を行おうとしていたことがよく分ろう。「女王国」は朝鮮にいた倭の一部が北部九州に移ってつくった支族共同体だからである。魏の朝鮮に対する植民地支配は、その総督的な帯方郡太守をしてさらに九州に及ぼそうとしていたのである。その意図は、本稿の「邪馬台国」の項でもいったように、玄界灘沿いの地帯に特別区をつくって帯方郡の直接統治下におき、「女王国」への侵略的意味での支援と監視に当たせたのである。九州以外に散布した朝鮮からの移住者集団は、事情が違っていた。**九州を除く西日本にひろがっていた彼らは、おそらく朝鮮の日本海岸地方『魏志』『東夷伝』にいう濊貊わいはくや辰韓の地域から出雲と越前しとをつなぐ裏日本一帯に渡来していた種族であったろう。**そうして彼らは中国山脈と飛騨山塊の間に出来ている丹後や越前の山峡から山城や近江に入り、大和盆地にひろがり、西しては大阪湾沿岸から吉備地方に伸び（吉備地方には中国山脈の裂れ目からも谷や川沿いに来られる）、また南して河内から紀伊の海岸沿いに伸びたのであろう。畿内一帯が紀伊をふくめて、記・紀に**「イツモ」族と呼ばれる日本海側朝鮮系の勢力**がこうして存在したのであろう。かれらもまた先住の南方系原住民をもその人口増加の上から制圧したのである。**九州と、それを除く西日本の朝鮮渡来人には以上のような性格の相違こそあれ、両者ともわたしは「原始形態」につづく「第一期」の渡来人形成**といいたいのである。この「第一期」渡来人形成の段階までをわたしは**「倭」部族連合体の形成**と呼びたい。まだ未熟な時期である。

186 日本の「原始形態」の状況に**「第一期」の渡来人形成**があった。これは西日本に弥生式文化のはじまる**前三世紀から後三世紀にかけて完成**したとみるべきであろう。

187 **「高天原民族」**（後の移住民）すなわち**「第二期」形成の前に、大陸・半島から先着移住による「第一期」の形成**があって、それらは**前からの土着原住民を支配する勢力になっていた**のである。

189 「第一期グループ」をイツモ勢力という名で呼んだのは、**「第二期」に属する『記・紀』の撰述者が先住の「第一期」グループを排斥して、地理上の出雲に追いやったように机上で創作した**からである。そのため、地理上の「出雲」の観念にまどわされて、これまで誤解が生じてきた。

191 先住朝鮮移住民勢力が後の勢力のために後退したのは、武力においても政治統治においても弱体であったからで、いうならば『魏志』『倭人伝』に書かれたような三世紀半の倭国の如く各地方の部族、いうところの多くのクニ（国々）の連合体の盟主程度であったろう。この群小のクニも先住朝鮮移住民勢力と同一の種族であり、わが国に渡来した時期、団体的実力などの相違によって地方間に格差があったにちがいない。そのクニの名残りが、「出雲」のほか「吉備・但馬・古志・信濃・熊野」など新来の朝鮮移住民勢力との妥協におくれた地方勢力であろう。「越前・山城・紀伊・伊勢・美濃・尾張」などのクニは比較的早く服属した地方勢力であったろう。そうしてクニによって差異はあったろうが、だいたいにおいて**「第一期」形態は先住民族を服従吸収した上で、同じ生活文化と宗教をもった。これが土着勢力で、「天孫民族」とか「ヤマト民族」とかいう後から割り込んできた移住民によって「イツモ」とつけられ、「出雲文化」とか「出雲系信仰」とか呼ばれた**ものである。津田（左右吉）が「神代史上のイツモ系統の神々の名とヤマトの某々の土地との間に関係をつけることは、一時に行はれたのではなくして、漸次に案出せられたもの」といっているのは、イツモ系統の神を畿内の土着神として考える限りはうなずける。しかし、日本海沿岸にひろがる地理上の出雲地方と朝鮮との関係は、『記・紀』の造作をはなれて別個に考えなければならない。『魏志』『東夷伝』にみえている東沃沮よくそ、濊わいは、前にもふれたように朝鮮の日本海側の種族である。かれらはまた東シベリアの悒婁ゆうろ・夫余といったツングース系統にも属していたらしい。のちに濊貊わいはくと南を接する辰韓から新羅が興り、これが西側の百済と対立していたこと、鴨緑江北方から朝鮮西海岸の楽浪に南下した高句麗が、日本海側南部の新羅と一時的

にしても同盟関係にあったこと（それは百済掃滅という共同の目的による政治的連合であった）などを考えると、『書紀』の一書に高天原追放後のスサノオが百済に渡らずに、新羅に渡って出雲にきたとあるのも、出雲地方に拠ったのも、やはり日本海側朝鮮勢力との連絡が前からあって、その方面の渡来があったと思われる。そのことが『記・紀』の撰述者の意識に上っての右の造作になったといえる。

192～193 大和の先着移住民勢力は後来の移住民勢力に屈伏したままではなかった。何回となく反抗が起り、あとから割りこんできた勢力を手こずらせたにちがいない。……そのたびに、ヤマトと在地勢力の「イヅモ」との間には平和交渉が行われたにちがいない。ヤマトとしては武力を避けて、平和交渉にしたかったので、どうしても妥協的になる。一方、「イヅモ」側にすれば、ヤマト側がその妥協条件を実行するかどうか、あるいは欺瞞ではないかという警戒心が当然にあった。これはヤマト側においても同様で、譲歩に応じたものの「イヅモ」の離反という猜疑心は持っていた。このために互いが相手の真意なり誠意なりをたしかめ合う交渉も重ねられたにちがいない。これが「天安河あめのやすのかわの誓約うけい」の説話の一面にもなったのであろう。

206 くりかえすようだが、イヅモ民族といい、ヤマト民族といい、大陸・半島系の同一民族である。その出身地によって種族的な差異があっただけである。両者の大量な渡来という大きなうねりが二、三百年くらいかかって一応終り、原住民族との混血や環境条件の変化によって、四世紀に入ると日本列島人は体格が急速に変わって、均等化する。

221～222 大和朝廷創作の中央神話（畿内を中心とする大和朝廷本位の神話）と、同じくイヅモ神話とを結ぶ狂言回しがスサノオであり、中央神話とヒムカ神話とを結ぶそれがニギの天孫降臨であるとは、前に書いた。この二つの天上界よりの下降について前者は「懲罰追放」、後者は「勢力集団の移動」の形をとっている。イヅモは、大和朝廷にとって敵対国であり、異民族の国であるから、その異民族首長の祖であるスサノオを、その背には千位ちくら（『紀』では千座）の置戸を負わせ、その髪を切り、その手足の爪を抜くといった体刑をアマテラスは科して冷酷無残に放逐した。スサノオの供は1人もいない。ヒムカは、大和朝廷の故地として、そこの首長の祖であり、また天皇家の祖であるニギにアマテラスは三種の神器を与え、いわゆる五伴緒いっとものおその他多勢の供人を付して降下させた（『記』）。

318 スサノオは「根の国」に赴くことになった。「根の国」とは本来の領有地、つまり本貫という意味である。そこが出雲国であった。出雲国は、朝鮮から列島に上陸した第一地点であり、列島における根拠地であった。前にもたびたびふれたように、「天孫民族」より先に渡米した朝鮮からの移住民族は、おそらく朝鮮の東側、日本海に面した現在の咸鏡道、江原道あたりにいた濊（わい）・貊（わい）はくとよばれる種族が多かったと思われる。かれらは夫余系の支族だが、のちにその北方にいるのは高句麗に、その南方にいるのは新羅に吸収されたい。その双方に入るのを好まなかった種族が海峡を越えて、日本海沿岸に上陸し、そこから内陸に入って近畿一帯に勢力を伸長し、部族の移動となったのであろう。これが、いわゆる「**イヅモ**」勢力である。したがって、かれらにとって地理上の出雲国は日本における本員の地であった。その前の故郷は、海峡を越えた朝鮮の東南部であった。根の国の「根」とは「本来」を現わす意味で、現代語的にいえば「根源地・根本地・根拠地」ともなるであろう。